

## 武蔵野日曜聖書講筵 復活節

## 復活の力

## ——マタイ伝第 28 章 1 ~ 10 節——

1988年4月3日

小池辰雄

キリストの本当の変貌 霊震 その愛には圧倒されました キリストの甦りの力 十字架の門  
 を通ってキリストの中へ ロバート・サウスウエル キリストの愛 神の愛の力 屍を乗り越  
 えて前進 無力の力 静動一如 天恵の諸力 (参考) 「教育と福音」

## 【マタイ 28】

1 さて安息日おわりて一週<sup>ひとまわし</sup>の初めの日のほの明き頃、マグダラのマリヤと  
 他のマリヤと墓を見んとて来りしに、<sup>2</sup> 視よ、大なる地震あり、これ主の使<sup>つかい</sup>、  
 天より降り来りて、かの石を転ばし退け、その上に坐したるなり。<sup>3</sup> その状<sup>さま</sup>  
 は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。<sup>4</sup> 守りの者ども彼を懼れた  
 れば、戦<sup>おの</sup>きて死人の如くなりぬ。<sup>5</sup> 御使、こたえて女たちに言う『なんじら  
 懼るな、我なんじらが十字架につけられ給いしイエスを尋ぬるを知る。<sup>6</sup> 此<sup>ここ</sup>処  
 には在<sup>いま</sup>さず、その言える如く甦り給えり。来りてその置かれ給いし処を見よ。  
<sup>7</sup> かつ速<sup>すみや</sup>かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦り給えり。視よ、  
 汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼<sup>かしこ</sup>処にて調<sup>まみ</sup>ゆるを得ん」と告げよ。視よ、  
 汝らに之を告げたり』<sup>8</sup> 女たち懼<sup>おそれ</sup>と大なる歡喜<sup>よろこび</sup>とをもて、速かに墓を去り、  
 弟子たちに知らせんとて走りゆく。<sup>9</sup> 視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』  
 と言<sup>い</sup>ひ給いたれば、進みゆき、御足を抱きて拜す。<sup>10</sup> 爰<sup>ここ</sup>にイエス言いたもう  
 『懼<sup>おそ</sup>るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼<sup>かしこ</sup>処にて我を見るべきこ  
 とを知らせよ』

## ●キリストの本当の変貌

今日はキリストの復活祭です。40何回と、私は復活節を迎えています。毎回新しいわ  
 けです。聖書は決して古びない。これは本当に常に新たなる書です。理屈の真理ではない  
 から。生命の真理です。永遠の生命、永遠の光、永遠の愛。他の何もものもこれを与えるこ  
 とができない。本当にもつたいないですね、これは。他のことでみんな何かごまかしてい  
 るわけですけれども。聖書の現実に来たら、これこそが本当の現実だということですよ。

旧約聖書に、



「空くうの空なるかな。すべて空なり」

とあるが、全くその通りです。キリストをぬぎにしたら、「空の空なるかな。すべて空なり」で空しい。もちろん、人間的な信実まことさというものはありますけれども、それはしかし、残念ながら、本当の生命をもっていない。だから、本当の信仰をもたない方は、普段非常によさそうでも、いざとなるとやはり崩れる。

ところが、この福音の世界は、いろんなことにでつくわせばでつくわすほど逆に力がくる。聖霊の世界は本当にそうです。どんなに人に誤解されようとも、いじめられようとも、迫害されようとも、逆に力がくる。ありがたくてしようがない。そういう世界です。これはキリストの直弟子たちの次元なんです。いわゆる神学でも、いわゆる聖書註解でもない。皆さんは、キリストの中に祈り入って、祈人の存在です。

「復活」と言うならば、我々が本当にキリストとともに復活しなかったら、復活節なんて言っただけで、つまらんですね。今言った「伝道の書」に、

「日の下に新しきことなし」

とある。太陽の下に新しいことはない。みんな繰り返してみたいものだ。ところが、ただ一つ新しいことが起きた。それはキリストという存在が現れたこと。そして、彼の言動、彼の十字架、彼の死、彼の復活、それから、彼からくる聖霊。これはみんな新しい。古びない新しきです。そういう歴史を両断するところの新しきことが起きた。これに接しなかったら、本当に空しい。

「カトリックだ、プロテスタントだ、無教会だ、何だかんだ」

と、派ではない。問題は、このキリストに本当に一人びとりがぶつかって捕まえられるか、キリストと一つになるかということです。

そういうわけで、本当は「復活」という言葉があまり当たらない。死んだのが復活またを吹き返したという、そんな復活ではない。今までの地上のキリスト以上の、霊体たまを持ったところの驚くべき存在に変貌へんぼうなされた。これが復活です。キリストの本当の変貌と言った方がいい。メタモルフォーゼです。

### ● 霊震

マタイ伝28章、マルコ伝16章、ルカ伝23章から、この復活のことが始まっている。マルコ伝16章1節に、「安息日終りし時」と書いてあるのは、ユダヤの安息日で土曜日のことです。即ち、ユダヤ人の一日というのは夕方から夕方までです。創世記に、

「夕あり朝ありき。これ首はじめの日なり」

とあるでしょ。だから、翌日の午後の6時頃、これが安息日の終りです。金曜日の夕方から土曜日の夕方まで、これがユダヤ人の安息日です。イスラエルに行くときでもそうです。いろんなものが止まってしまふ。女の方は煮炊きしない。ユダヤ人というのは、そういう



ことははつきり守るね。

ま、日本人くらい、無法則の世界はない。とにかく、妙な間違った自由でね、学生なんかの生活を見ても、私たちの学生時代とだいぶ違う。大体、服装がそうだし。いったい、日本はどうなるかと思っている。去年の秋、京都で語った

#### 「教育と福音」

という文章を『エン・クリスト』34号に書きましたから、読んでください。私は教育を50年やってきましたから。いわゆる教育で教育なんかできやしない。日本は一番大事なのが教育なんだが、問題は教育者自身の問題です。制度でも、生徒の問題でもない。教育者自身の問題です。

安息日が終わった。

「安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買い、<sup>2</sup>一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。」(マルコ16・1、2)

「マグダラのマリヤ」というのが、復活のクリストのところではどれを見ても、一番出てくる。七つの悪鬼を追い出されたマグダラのマリヤというのは本当にクリストに打ち込んだね。もう弟子どもはかなわん。クリストの御足にしがみついたのも、マグダラのマリヤです。

「さて安息日おわりて一週<sup>1</sup>の初めの日のほの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて来りしに、<sup>2</sup>視よ、大なる地震あり、

私に言わせると、これは霊震<sup>3</sup>です。決して単なる地震ではない。神の霊によるところの震動です。

これ主の使<sup>4</sup>、天より降り来りて、かの石を転ばし退け、  
 凄いね、御使が霊震によつてね。

その上に坐したるなり。<sup>3</sup>その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。

変貌のクリストがこういうありさまだった。

<sup>4</sup>守りの者ども彼を懼れたれば、戦<sup>5</sup>きて死人の如くなりぬ。

ローマの兵隊がぶつ倒れてしまった。

#### ●その愛には圧倒されました

クリストの死は本当は、あるべからざることです。いきなり天界に、エノクよりもはるかに素晴らしく、行くことができた。墓の中に、クリストは眠っていたのではない。十字架で贖罪の死をとげた。万人のために。これを受けるか受けないかは、クリストが自分の罪を贖ってくださったことを受けない人は受けなくたって、それはご自由です。それだけ



のはなし。ただ、これを本当に受ける人は、新たに生まれさせられる。

私は、いつも申し上げているとおり、人間小池は過去も現在も未来も罪びとにすぎません。しかしながら、その罪びとにすぎないもうひとつ奥に、過去も現在も未来も私は贖われきっている。このキリストの贖いの力は、私の罪にも死にもうち勝つてくださったっている。うち勝たしめてくださっている。これは絶対恩寵であって、これを受けとるか受けとらないかは、こちら側のはなしだ。こちら側のはなしだけれども、私は受けとらざるを得ないんです。

「自分が信仰で受け取りました」  
なんて、そんなことを白々しく言えやしない。

「その愛には圧倒されました。だから、受けとらざるを得ません」  
と、それだけののはなしです。私は、

「自分が信仰がある」  
とかなんとか、そんなことは言いたくない。そこには、聖霊は臨まざるを得ないんです。これは自分の体験せしめられている告白ですから、世界中の人が何と言おうと、私はかく言わざるを得ない。マルチン・ルターが

「我ここに立つ。かくせざるを得ず」  
と言ったのと同じことです。あなた方も、十字架をその通りにお受けとりになったら、同じく「正に然り」とおっしゃると思います。

誰でも例外なしに、その世界に入れる。これは無条件の世界だから。

「これだけ聖書を読まなければ、人を愛さなければ、これだけどうししなければ」  
という条件はひとつもない。十字架上の片一方の盗賊も最期に心が砕けて、

「せめても私を覚えてください」  
と言ったら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」  
と言われたでしょ。キリストと一緒にまっ先にパラダイスに入ったのは、さんざん悪いことをした盗賊だ。これは阿弥陀さんの本願よりもっと力強い世界です。

仏教は悟りの世界が非常に強い。けれども、私は悟る必要はない。あるがまま受けとつていけばいい。禅宗の坊さんは坐禅なんか組むけれども――何もそれをけなすわけではないですよ、聖道門だから、それはそれとしてひとつの真理性はあるけれども――私は坐禅を組む必要はない。ただ平伏して祈るだけ。祈り入るだけです。

### ●キリストの甦りの力

とにかく、もの凄い現実、霊的な力の発動しているところの世界です。マタイ伝の今日読んだところは、今甦らんとするキリストの、新しく霊体をもって甦れんとするキリストの前奏曲なんです。天使が前奏曲をそこに現れているわけです。



5 御使、こたえて女たちに言う『なんじら懼るな、我なんじらが十字架につ  
けられ給いしイエスを尋ぬるを知る。6 此処には在さず、その言える如く甦  
り給えり。』

もう甦つたと。三度、預言されましたから。

来りてその置かれ給いし処を見よ。7 かつ速かに往きて、その弟子たちに「彼  
は死人の中より甦り給えり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに往き給う、  
彼処にて謁ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり』

ガリラヤに行かれる前に、エルサレムに現れなきつたけれども。ペテロが真先に告げら  
れた。しかし、ペテロも弟子たちも初めは受けとらない。

「何ごとか?」

なんて言つて。

キリストの甦りの力——今日は「復活の力」と題したんですが、「力」はダイナマイトの  
語源の「デュナミス」という字です——これはもちろん、神の力です。ヘブライ語の「エール」  
「神」という字は「力ある者」という意味です。最上の力を持つたかた。この力は暴力ではない。  
人間の持っている力は暴力が多い。戦争は暴力の最たるもの。暴力と悪知恵のあるやつが  
世の中にむさぼっているわけだ。歴史の終りまで。だけれども、そんな暴力は、暴力自ら  
亡びていく。神さまの方は黙つていても。しかし、ある時が来ると、羔の怒りというのが  
くる。最後の審判です。怒りというのは義の現れなんです。義の別なひとつの現れ。それ  
が審判なんです。「審判人」というのが旧約の士師記にある。

### ●十字架の門を通つてキリストの中へ

審く義は、しかしながら、それに平伏すと、この審く義が「与える義」になつてしまふ。  
恵みになつてしまふ。義が恵みに、恩恵になる。キリストは義そのものです。地上でもつ  
てキリストがいつぱん怒りを発した。それは宮潔めです。神殿を商売の場にしていたから、  
キリストはこれをひっくり返してしまつた。けれども、この義は、それでは自己主張かと  
いうと、決して、自己主張ではない。これはもともと神の義なんだから。神の義にこれ従つ  
た、それが義人キリストです。キリストの義というのは、神の義なんです。要するに、み  
んな神です。パウロが言つた、

「神の義が福音にあらわれた」

というのはそのことです。神さまに「はいつ」と、神さまに

「然り、然り」

と言つて従うことが即ち、義である。だから、従う人は僕。キリストは徹底的な神の僕です。

「何故と聞かず、ただこれ従つて、十字架の死に至るまで従いたまへり」という。これが義人の義の姿です。



その神の御意に、聖意に背く<sup>そむ</sup>ことが「罪」なんだから。「神の御意に背く」というのは、「自分の意志を立てている」ということ。自分の意志を立てることが、この福音の世界では罪なんです。道德の世界では、意志を立てていいですよ。それがいわゆる相対的な意味で正しくても、相対的な正しい正しくないではないんです、この福音の世界の義というのは。

「神の御意に全部これ従う」

というのが義の世界です。

神の御意というのは、内容が凄いからね。その中に入ってしまう。だから、従うためには、本当は神の中に入らなければ従えないんです、外側からでは。即ち、神さまと一如になることです。

「我を見し者は父を見しなり」

という現実に入らないと。ユリの花を見れば、ユリとなる。ユリを見てユリとなる人は本当にユリを見ている人だ。

「外から見えていたってダメだ。内観せよ」

ということ。とにかく、一つにならないとね。悪いものと一つになったら大変だ。

神さまと一つに、我々はなれないんです。ある神秘家はそういうこともやりましたけれども、そいつは危ない。我々はこの義——神さまと一つになった義人キリスト——これとは一つになれる。その道は、

「我は門なり」

という十字架という門を通って、十字架という門を通れば、これは無条件に一つになれる。贖われる。

「贖われたから、さあ、来なさい。来たれ」

と。それで、キリストのところへ飛び込んでいく。あるがまま、ダメなまま。整える必要はないですよ。あるがままでもいい。もう贖われているんだから。相対的人間小池はどうだって構わない。私自身をこの十字架の門を通って、キリストの中へ投げ入れる。そうすると、力がくるんです。

これは義でもあり、愛でもあり、生命でもあり、光でもあり、力でもある。サタンをやっつける力。もう非常に簡単なんです。問題は、あなた方が聞きながら、直ちにその世界に入っていたかなくては。

「はあ、そうですか。それではそのうちにやります」

なんて、そうじゃないよ。今直ちに、同じく、同じ瞬間にやらなくては。

### ●ロバート・サウスウエル

ロバート・サウスウエル (Robert Southwell) という人——日本語ではサズルと言っているけれども——1561年から1595年まで生きたイギリス人で、カトリック (イエズス



会)です。カトリックの人には凄いのがいるね。どうもプロテスタントは理屈が多くていかん。あの頃は、イギリスでは非常に反カトリックであった。宗教的にカトリックの人を審いた。牢屋に入れてしまう。これはエリザベス王朝の時だ。しかし、この人はローマに行つて、またイギリスへ帰つてきた。

「イギリスへ帰つたら、お前は危ない」と。もう危ないことは分かっている。

「それでも、行きます」

と。決死というか、必死の、一対一の伝道をする。地下伝道だね。

「私は虎狼のさ中に送られて行きます。屠殺者に渡される羊のようなものです」  
 と。そういう気持で出かけていく。これは友人に宛てた手紙の一節です。この人はやつぱり『マグダラのマリヤの涙』という本も書いているな。迫害の網の下を潜つていく。とうとう捕まつてしまった。ある家庭を信じていたところが、その娘が裏切つた。1592年のことだった。そして、牢屋に入れられて、非常にむごい仕打ちを受けたらしい。その牢屋の中で詩(『死からの勝利』、『慰めの書簡』他)を書いた。これは少ない詩ですけれども、非常に切実たる詩ですね。

「おお、生命よ。なごて早き死を妨げんとするや」

と。私はもう早いとこ、死を越えて、もうひとつ凄い世界に入りたいと。

「おお、死よ。なごてこの生贖を引き止めんとするや」

凄いね。殉教の死を喜んで受けると。

「われ生くれども、かかる生命は永遠に死なん。」

われは死ぬれども、かかる死こそ永遠に生きん」

即ち、この死はただの死ではない。この殉教の死は永遠の生命の中に入っていくんだと。正に復活の生命です。本当にキリストに祈り入り、キリストの愛でもつて動いている。キリストの愛のことを非常に歌っています。今生きているけれども、捕まっているこんな生命は死だ。けれども、死ぬけれども、殺されるけれども、この死こそ永遠の生命だと。

「かくて、われ死ぬれども、われ甦る。」

わが生ける死は、死せる生をもて養われるのである。

生けるところにあらで、愛するところに我は生きん。」

キリストの愛のことです。

## ●キリストの愛

そういう復活の生命、キリストの愛の生命を受けとることです。この前も言いました。「主われを愛す」というあの讚美歌461番はアルファでオメガだと。主は、キリストは私を愛してくださっている。あなた方は、無条件にそのキリストの愛をいただく。



「主われを愛す。主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらず」

と。そんなことは問題ではないと。キリストの愛は、もちろん、この福音書に表れている。福音書に表れているのは三人称ではない。福音書の言葉は、みんな我々一人びとりに二人称として呼びかけている。「彼を」といったら、「汝を」といって一人称と二人称に読んでいかなければダメですよ、福音書というのは。ただ歴史を言っているのではない。現実に私たちにドラマとして迫ってくる。

「聖書はドラマであるから、その中に身を投じてキリストに捕まえられて、キリストに聞け」

ということですよ。読むのではない。聖書は聞く本であり、捕まえられる本である。聖書の読み方で、そこまではつきり言っている人はおそろくないでしょう。「聖書入門」なんていつたつて大したことないんだ。今度の第十卷（小池辰雄著作集第十卷『聖書は大ドラマである』）を読んでくださいよ。その角度から書いてあるから。

十字架の死をもって愛してくださった。復活の生命をもって、

「この生命を受けよ」

と言って、愛してくださったっている。

「聖霊を受けよ」

と言って、愛してくださったっている。

復活節、ペンテコステ、クリスマスの中で一番大事なのは、ペンテコステ、聖霊降臨節なんです。

「聖霊を本当に受けとらなかつたら、キリスト者にあらず」

と、パウロは言っているんだから。その土台は、一昨日の十字架、そして今日の復活です。これが土台になっている。そして、聖霊降臨がやってくるわけだ。五旬節です。四十日間、キリストが現れて、なお十日間祈っていたら、聖霊がやって来たというわけです。それが愛の内容です。キリストの言葉も行為も、十字架も復活も聖霊も全部、我々一人びとりに迫ってくる愛の行為です。

「主、我を愛す」

とは全くそうなんです。それを本当に受けとっていると、この日常生活の中で、いかにキリストが私たちを愛していらっしやるかということが今度は、個別的に事実をもって受けとられていく。どんなに酷い目にあつても、これははつきり「主、我を愛す」ですよ。

「迫害する彼らは気の毒だ」

ということになる。そして逆に、この愛が、これはみんな力を持っている。愛は最大の力だから。人を愛する。人を愛する前には、人をひとつも愛さなくて、

「ただ我だけを愛せよ」



とキリストは言っているんだから。

「我よりも、何々を愛する者は我にふさわしからず。己自身をも憎まなかつたら、我が弟子となることができない」

と言うんだから。凄いや、キリストは。自分自身を誰が憎むことができますか。しかし、それができるんです。

「こんなものは」

と言って、自分を吐き捨てるようにすると、キリストの中に入る。そうなるともう自由無礙になる。

今の人は本当の自由なんか知りやしない。本当の自主もありはしない。マルチン・ルターの、『キリスト者の自由』

は名著だから、あれは是非とも読まなくてはいかん。仏教の方でいうと、親鸞の『歎異抄』です。この二つは珠玉の二篇であると私は言っている。

その愛に圧倒されるから、キリストを愛せざるを得ない。そうすると今度は逆に、他の人たちを、捨てたと思った人たちを全部、拾い上げてしまう。しかし、

「そんなのは要らないよ」

と、キリストから逃げていけば、それだけのはなし。肉親の者たちが一番キリストに躓いた。大体、そうだね。だから、キリストはナザレから出てしまった。

「預言者は故里ふるさとに入られない」

とは、キリストの言葉だ。後からやつと目が醒めて、戻って来たけれども。

そうなんですよ。この集会から出て行つたつていいよ。けれども、本当に分かつたら――「分かつた」というのは頭ではない――そうしたら、帰って来ざるを得ない。ところが、さつぱり帰つてこないね。それはそれぞれの所でやっていて、

「もう救われました。先生のところへは行きませんが、やつと、先生、分かりました」

と、葉書一枚でもよこしたらいい。ところが、一人もよこさない。お気の毒さまだ。私はひとを審くのではない。それぞれのところでもよかつたら、それで結構でございます。仏教へ行つたら、仏教でも結構でございます。ただ

「本ものになってください」

ということだけです。そういう愛です。

「先生が躓いても転んでも、私は先生を担いでも行きますよ」

と、そういうのが本当の私の弟子だ。弟子ということをお願いいたくはないけれどもね。キリストの愛というものは、それだけのものをもっている。君たちが躓いたり転んだりして、

「先生、助けて!」

と言つたら、いくらでも私は駆けて行くよ。さんざん背いたやつでも、

「いやあ、またやつて来ました」



とやってくれば、無条件に受けとれるよ。

「昔はこうだったではないか」

なんてことはひとつも言わない。お互いさま。人を審くと審かれる。

### ●神の愛の力

そういうように実は、復活の力の奥は神の愛の力である。神の愛の力がキリストに及んで、そしてキリストをしてかく在らしめている。

ゲエテの『ファウスト』の797行から807行のところにもこういう句がある。

「キリストは甦りたまえり、

滅びの胎の中から。」

「滅びの胎の中から」とは、滅びの地上からということですよ。

……

行為をもって彼を讃美する者、

愛を証しする者に、

兄弟姉妹の愛をもって人に食物を与える者、

キリストの喜びを約束してくれる者たち、

そういうあなた方に、

この師匠なるキリストは近くにいたもう。」

「彼はそこにいらつしやるではないか。そういう素晴らしい復活のキリストとそのようにして歩こうではないか」

「ゲエテがクリスチャンであるか、クリスチャンでないか」

なんて、そんなくだらないことを言う必要はない。これだけのことを告白できる人ですから。世の中の評価というものは全く、うわつづらのことばかりやっているな。

そういう甦りの力を私たちは、一昨日の十字架のキリストの贖いを本当に即受けて、十字架即復活の生命にあずかる。キリストは甦らざるを得ない人です。昔は

「どうして、甦っただろうか。どんなようにして甦っただろうか。ここまでは本当だろうか、うそだろうか」  
なんて、くだらない研究ばかりやっていた。そんなことはひとつも要らない。

「彼が甦らなかつたら、彼がもの凄い生命の世界を現さなかつたら、何がキリストか」

となる。何がイエスかということになる。聖書はうそつぱちになる。そうだよ。パウロがコリント前書15章で、

「キリストが甦らなかつたら、我らの信仰は空しい」



と、さんざん言っている。もし、キリストが甦らなかつたら、我々の信仰は空しいと。あれほどまで、

「十字架、十字架」

と言っているパウロが、

「復活のキリストがなかつたら、我々の信仰は空しいんだ」

と。だから、もちろんパウロは、十字架も復活も聖霊も渾然一つとなっている。それをバラバラに分析して、いわゆる論理的なことをしようと思つたら、そんなことをしたってダメなんだ、今の神学は。だから、私は、

「組織神学ではないぞ。生命的な、有機体的な、オルガーニシユなものだ」

と言っている。どうですか、楽しいでしょ、皆さん。

### ● 屍を乗り越えて前進

ペテロはさんざん躓いたり転んだりしていた。そのペテロが――これはペンテコステの話になるからやめておくけれども――ガラリ変わってしまった。私自身がとにかく、阿蘇でキリストの聖霊を天界から受けとつたから、それからガラリ、聖書の読みが変わってしまった。無教会はサヨナラということだ。内村、藤井、塚本、みんな無教会の立派な先生方です。それぞれの役割をお果たしになりました。けれども、使徒的な信仰のこの次元からはズレている。藤井先生は、

「内村先生の屍しかばねを乗り越えて前進する」

と言った。私は藤井先生の屍しかばねを乗り越えて前進していく。あなた方も、小池辰雄の屍しかばねを乗り越えて前進してくださいよ。限りなく展開するのが福音の世界ですから。

「身はたとひ武蔵むさしの野辺に朽ちぬとも留とどめ置かまし大和魂やまと」（吉田松陰）

と。維新の大一級の人物、吉田松陰、坂本龍馬。ああいうような人たちは本当に、本当の死を死んだんだ。佐久間象山もそう。西郷南洲もそうだ。彼らは、それから後で生き残った連中よりもみんな本当に生きている人だ。

ああいうのはみんな天界に行っている。私の大きな詩にはみんなそういう人物が出てきますよ。楽しくてしょうがない。この福音をいただいたら、私は詩を書かざるを得ない。これは私が賜った使命だから仕方がない。

こんな腐った世の中は、日本はどういう国かね。「経済大国」なんて言つたって、「大国」は「顔国」ではないかな。もう頹落する。滅びていく。土地問題だつて、こんな馬鹿げたことは世界中にないでしょう。この日本の地価でもってアメリカが買ってしまうという。無血革命でも起こしたらいい。ガンジーだつたら断食するだろうね。

とにかく、いいですか、このキリストの義、これに本当に沿つて生きてください。世の中の行き方と我々は絶対に逆らっていく。逆流、逆行する。けれども、この逆行は相対的



な次元ではない。絶対次元だから、必ず勝つんです。本当は相手にならない。

### ●無力の力

何と言つて表現していいか分からないね。ちょうど、大気みたいなものだ。気、空気です。この部屋の空気は今、静かで無風です。ところが、気の世界は嵐にもなる。微風ともなる。烈風ともなる。自在である。水もそうだ。静かな水、せせらぎの小川。そうかと思うと、大河となつて何ものをも流す。海の水となつたら、津波となつて何でもひっくり返してしまふ。

とにかく、四大五蘊<sup>うん</sup>、地水火風空という。地は、大地のごとく何でも呑んでしまふ、受けとつてしまふ。どんなビルディングだつて、お前は重いなんて言いやしない。水は今言つたようなこと。火はまた凄い。さつきのサウスウエルの中にキリストのことを

「火の幼児<sup>おさなご</sup>」

という凄い詩がある。キリストは燃える赤子であるという。聖霊は火の如く臨んだ。風の如くやつてきた。空々漠々として捕捉できない。

これはみんな不思議な力をもっている。要するに、その不思議な力というのはみんな御霊の力です。霊的な力、霊力です。この霊力の質は何かというと、愛なんです。サタンに対してはやつつけるけれども、悪いやつもみんな救い上げようとするところの愛です。そういう力です。暴力ではない。救いの力です。これには参るです。

あるときには、無力の力と言つたらいい。全然、受け身です。その極致が十字架なんだから。「彼らは為すところを知らず、赦してやってください」

と。それを受けとらないと、今度は審かれるです、受けとらない方が。地獄へ行つてしまふ。自分で地獄行きをやるわけです。片一方の盗賊がそうなんだ。

「お前は神の子なら、救つたらいいだろう」

なんて傲慢なことを言つたら、そつちは地獄なんだ。

### ●静動一如

マタイ伝 11 章 20 節、

「ここにイエス多くの能力<sup>ちから</sup>ある業<sup>わざ</sup>を行い給える町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給う、<sup>21</sup>『禍害<sup>わざわい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、コラジンよ、禍害<sup>わざわい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、ベツサイダよ、』  
と言つて、この救いの力を受けとらないのは、お前たちは禍害だと。

汝らの中にて行いたる能力<sup>ちから</sup>ある業<sup>わざ</sup>をツロとシドンとにて行いしならば、彼らは早く荒布<sup>き</sup>を著<sup>き</sup>、灰の中にて悔改めしならん。<sup>22</sup>されば汝らに告ぐ、審判<sup>さはん</sup>の日に、ツロとシドンとのかた汝等よりも耐え易<sup>やす</sup>からん。

ツロとシドンというのは昔の悪い町だけれども、まだあつちの方がましだ。お前たちはも



つとしようがないと。

### 23 カペナウムよ、

これもそうだよ。カペナウムはキリストが伝道された根拠地だった。

なんじは天にまで挙げらるべきか、黄泉よみにまで下らん。汝らのうちにて行いたる能力ちからある業わざをソドムにて行いしならば、今日までも、かの町は遺りのこしならん。24 然れば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐え易からん』(マタイ 11・20 ~ 24)

それくらいカペナウムはやつつけられた。烈しいね、キリストの言葉は。この力ある業をなぜ受けとらないかと。これは救いの力なんだから。暴力ではないですよ。

キリストの言葉は全部、力ある業をもって裏付けられている。いわゆるお説教ではない。全く、言行一如、信言行一如だ。絶対に分かれてない。これを全一的という。全一的、全的。「ガントツハイト」という。これはゲートの好きな言葉です。『ヴィルヘルム・マイスター』の遍歴の終り方のゲートの言葉は凄いよな。

ペスタロッチの言葉に、

「自分の為には何も求めない。一切は他の人たちの為に」

という言葉がある。そういう生き方をした人には上から限りなく力がやってくる。

「0 = ∞」(ゼロ = 無限大)

になる。

「1 ÷ 0 = ∞」

です。復活の力というのは霊生の力だね。霊的な力。そうすると知恵も湧いてくる。創造的になる。まあなんて、福音の世界は熾さかんなるかなというわけだな。

キリストは神の力が完全に貫いている方です。そして、十字架をあえて受けとるのは、これが最大の勇者です。我慢して十字架に架かったのではない。人間を乗り越えた。人間性は持っていますよ、キリストは。血の涙を流した。大変な人だね。

これも、キリストの世界は静動一如なんです。静けさと動とが一如。動の行為の奥には深い静がある。静の姿の中にはもの凄い動がある。私は、聖霊が来てから、そういうようなことが自由に言えるようになってしまつて、正直、不思議でしょうがない。聖霊以前では、そういうことが頭で言ったかも知れないが、それは頭ではダメなんだ。本当に私はそう感じていいるから、言っているだけののはなした。

### ●天恵の諸力

ヒルティはやっぱりこういうことを言っている。

「最初の使徒たちの天恵の諸々の力は確かに存在する。それは一時期盛んになった唯物的時代思潮のために多少後退しただけのことにすぎない。この力を有する人々は、



しかし、それを極めてよく知っており、他の人々も本能的に彼らにそういう力があることを感じ、思いあやまることはない。ただ、こういう力は是非とも用いられなければならぬ。徒に存在するだけであってはならない。それによって諸君の希望するような教会の確信も生ずるので、教会会議や様々な会議、諸結社や諸教会によって生じはしない。多数の人々の中にこういう霊の力がなければ、何事も無益なことだ。」

「あなたがこの活力を区別しようと思うならば、この力の最上のもは聞き届けられる祈りである。なぜなら、それは他の諸力、即ち病者を癒し、罪を赦し、未来を予想する力を含むからである。これらの力も祈りによって神からのみ授けられるもので、自分自身のただ一度限りの力によって得られるのでは全然ない。」

ヒルティは使徒行伝やパウロの手紙などに書かれている現実をそのまま率直に受けとめている。「天恵の諸力」と訳されている言葉は「デイ・ガーベン」という簡単なドイツ語であるが、これは日本語訳聖書では「賜物」と訳されている言葉で、ギリシャ語では「カリスマータ」で、天与の霊的能力のことである。云々。現代の教会では、こういうカリスマ的霊能が殆ど働かない。使徒行伝の現実、換言するならば、使徒的信仰の現実が二千年前と同質的に現前しているし、そうであるべきだとヒルティは断乎として言い放っている。これは筆者も全く同感である。聖霊の賜物と言ってパウロがコリント前書12章、14章で詳しく述べている事態がこれで、そういう霊的な力が現代のキリスト教界に希薄になっているのは、要するに一般的に申して、聖霊のパプテスマを本当に体験していないからに起因している。」

無教会がそうだもの。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、全部。だから、塚本先生が、

「僕の伝道は間違っていた。手島君や君のが本当だから、しっかりやってくれ」

と言われた。これは塚本先生の遺言ですよ。しかし、先生はそれを公には言わない。公に言うと、無教会は大変なことになるから。塚本先生が脳軟化症になる前の、私がお訪ねした最後の会見の時のお話です、告白です。私は不思議でしょうがない。

皆さん、

「私には力がない」

ではないですよ。本当に祈り込んでごらん下さい。不思議なことが働くから。それは愛の力なんです。これが、

「キリストがもし、甦らなかつたなら、我々の信仰は空しい」

と、さんざん言っているパウロがはつきり分かる。その通り。では、午前の集会はそこまで。



(参考)

## 「教育と福音」

――講演要旨、1987年11月21日（京大会館）――

私は25歳から75歳まで、正に50年間、半世紀を教育に従事しました。専攻はドイツ文学でしたから、ドイツ語及びドイツ文学の授業を通しての教育というわけでした。今日は端的に自分の生い立ちから今日に至る体験や見聞等の一端を通して、私の教育観を告白させていただきます。

私は5歳のとき父の病死に遭いましたから、専ら母の教育を受けただけです。乳幼児にとって母の存在は絶対的なものですから、母を失った乳幼児ほど可哀相なものはありません。たちばな あけみ 橘 曙覧の和歌に

「亡き母を慕ひ弱りて寝たる児の顔見るばかり憂きことはあつじ」

とある通りです。人生の初期たる胎児期から乳児期にかけての胎教、乳児教育は何といっても母親が一切です。母乳がどうも乏しいなどいう文明病の母親は乳児教育の大切な面を欠くわけです。母という漢字は乳房の象形文字であります。乳房を本能的に口でまさぐるときに乳児は無意識に母の愛を受けているわけでしょう。母親との膚の触れ合いほど大切な育児面はないでしょう。ラファエロ、デューラー等の聖母マリアと乳児イエスの画はその象徴的なものであります。

ことば 言の正しい意味で偉人の母親はたましいの質がよく、伝記を読むと偉人の母は殆ど例外なく敬虔けいけんな魂の女性であります。以ていかに母親が乳幼児の育生に決定的な存在であるかは察するに余りあります。ゲーテの母は太陽のように明るい性格で、誰をも愛し、誰からも愛される敬虔な女性でありました。そんなわけで乳幼児育生にとって母親が敬虔で愛の深い女性であることの重要性を銘記めいぎしなければなりません。

私自身はどのような胎児期、乳児期をすごしたかは知りません。その頃は本郷区（今の文京区）弓町、妻恋が住居地でした。母はお茶の水女学校の先生でした。

さて第二期は保育園・幼稚園時代となります。私はお茶の水幼稚園で御厄介になりました。雨の森先生という女の先生のお顔は今でも浮かんで来ます。遊戯や唱歌や折り紙の幼稚園生活が目の前に映画のように映って来ます。幼時の印象が70余年も経って鮮かに浮かんでくるとは不思議なことです。どんな理由わけだったか、私が泣いて立ちすくんでいたとき、雨の森先生が走って来て私を抱きあげて「どうしたの!」といたわって下さったときのこと、一番印象深く遺のこっています。幼児のたましいに先生の愛が込み込んでくることは何よりの贈物（プレゼント）です。ちゃんとした躰しっけを教え、また自由に遊ばせながら愛を以て幼児を育生することが何といっても保育園、幼稚園時代の基調でなければなりません。



家庭の母親と保育・幼稚園の女の先生が相俟<sup>あいま</sup>って愛を以て幼児を育てることが何よりのこととです。

私は孫どもの保育園時代に、その送り迎えを自転車に乗せてやっていたが、迎えに行つて、楽しそうに遊んでいても、私が名前を呼ぶと、まるでバネ人形が跳びあがるように、パツとその遊びをやめて飛んでくるのでした。キリストが

「<sup>ひるがえ</sup>翻<sup>おさな</sup>つて幼児の如くならなければ天国に入れない」

と言つたのは、幼児のこのような相<sup>すがた</sup>にあると思われず。「直ちに」のマルコ福音書の信行の相です。幼児の言動はすべて瞬間に全身を投入する性<sup>たち</sup>のもの、これが即ち信即行であるわけです。

「<sup>おとな</sup>幼児は大人の父だ」

とワーズワースがあつた有名な「虹」という詩で詠<sup>うた</sup>つていっているように、親も先生も幼児の全的な在り方から学ぶところがあつた所以<sup>ゆえん</sup>です。

ある私立幼稚園の先生が、聖書物語を心をこめて語ると、園児は眼を丸くして聴き入り、本当にそのまま信ずると言つていました。魂<sup>ふるさと</sup>の故里は宗教界ですから、宗教が実は教育の根底にあるべきで、そこに本当の生命力が湧いてくるのです。

万人は救いを要する、ということとは万人は宗教人であるということとです。ですから先生は保育・幼稚園から中学・高校に亘<sup>わた</sup>つて、ある程度の宗教性を衷<sup>うち</sup>に有<sup>も</sup>つことが、国、公、私立のわかちなく、まことにのぞましいことです。特定の宗教信仰のあるなしはしばらく措<sup>お</sup>き、宗教の奥義は超概念であること、高次の宗教には共通の消息があること等の正しい認識、神仏に対する畏敬<sup>いけい</sup>の念、道念（モラリティー）と人間性（ヒューマニティー）を以て、しっかり且<sup>か</sup>つあたたかく教え導くのが教育の本道でありましょう。

さて第三期は小学校（学童）時代となります。私は昔の東京高等師範附属小学校の第二部で教育を受けました（第九巻「感想と紀行」第五章「人物回想」の「佐々木吉三郎先生」の項参照）。この校長先生を想うにつけ、学校で一番大切なのは校長の人物です。この佐々木先生は稀有<sup>けう</sup>の人物でした。その毎週月曜の朝礼は「講堂修身」といつて20分くらい全校生徒が直立のまま聴講しましたが、先生の態度とその全身を以てする熱弁に毎回心をうたれました。この校長さんは全校の魂であり生命力の根源の感がありました。そして学校で大切なのは担任の先生の授業に対する熱意と愛であります。小学校では二年毎に担任が変更されましたが、特に素晴らしかった人物は五、六年生ときの担任芦田恵之助先生でした。今惟<sup>おも</sup>うと禪的な風格の先生でした。国語と作文の専門の先生で、その指導は堂に入ったものでした。

「作文はどんな題が課せられても自分との関わりで書け」

と言われました。「夏休み」という出題のとき、私は夏休みに温泉場で誰にも教わらず独りで工夫して泳げるようになったので、その体験を書いたら最高点を頂きました。あの作文は保存しておけばよかつたものを。どうか小、中学校の児童・生徒をおもちのお母さん方、

彼らの学校での種々の労作物を大切に保存しておくように御指導下さい。また是非日記を記すように。事実と何らかの感想を書くように。

愛を以て一人一人の天賦の才能、資質をよく認識し、その学童が将来どの方面に展開してゆくであろうとの予測をして、父母、特に母親と一対一で語って見当づけをすることは先生の大切な義務でありましょう。そしてクラス全員の指導に当っては、学び方、考え方の指導が極めて大切。入試受験のための技術などは第二義的のこと、いつも大切なのは、いかにして本当の実力を涵養するかにあります。本格的な勉学をしないで受験のテクニクに流れているのが今の一般の状況ではないですか。日本の少年、青年諸君は全く気の毒である。その徳性、智性、体力が、いかに軽薄、おざなり、脆弱であるか。これは日本の入試のやり方そのものの思い切った大改革によらねば、この禍根はいつまでも続くでしょう。またそのためには学制そのものの大改革を要します。その改革精神は佐久間象山及びその門弟の吉田松陰の松陰塾の塾精神です。あの短日月に凝集して光を放った教育を何処に見ることができるか、というすばらしいものでありました。世の一般の受験準備塾とは性格のちがう、信仰の深い塾長によって導かれている例外的な塾が大阪にあります。

社会は多種多様の職業者から成りたっている。それに適合する専門教育の学校が多種多様にあります。学生諸君はおのが学的要求、特技に應える専門校に入るべしです。天賦の才能にその人の天職が約束されている。ただ「大学卒」というレッテル大学生のいかに多いことか。その点ドイツの学生の自覚、アメリカの大学での研究のきびしさを思い知るべしです。

はなしをもとにもどしますが、要するに小学校では国語と算数の基礎的実力をしっかりとつけさせること。そして世界の童話の本をよく読ませること、小学生の魂に夢をもたせることが極めて大切です。

さて第四期は中学時代。私たちは中学といえば五年間で、楽しい少年時代でした。今は三・三制となり、高校への入学試験のため、中学三年間では「よく学び、よく遊ぶ」の原則が歪められている現状でしょう。高校までを義務教育として、落ちついて学力涵養も体力養成もできるように是非ともすべきであります。

昨今はテレビ、ビデオ、漫画等を見る時間が中学、高校生の生活の大きな部分を占めているのが一般のようで、しかもその内容が品性を歪めるような思わしからぬものが多いのは由々しき社会問題と思われれます。

中学校時代には、世界文学の名作の少年少女むきに書かれたものを是非じっくり読ませることです。欧米文学には聖書のころが融け込んでいます。それで本当の人間性が養われます。浪漫的、理想主義的な夢をもたない少年少女は少年少女ではありません。少年少女が、現実的打算的な考え方見方に大いに傾いているのは嘆かわしいことです。

第五期は高等学校時代。戦後の日本は戦前の封建的軍国主義的な因子の多かった生活意



識から、急に解放されて自由になり、無法則的な平等主義、同権主義が民主主義だといった一般の風潮が力を得て支配的となつたために、それに因る勝手な無責任な言動に流れて来ています。そんなものが本当の民主主義ではない。それは自由のはきちがいの身勝手主義です。自由は責任と表裏するもの、我執を抑えて真理、真法に即するところに本当の自由があるのです。プラトンのポリス論やカントの道徳哲学、シラーの美的教育論、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の終りにでてくる教育論等がよく自由と責任や調和ある人間性を語っており、それらの宗教的根柢はルターが『キリスト者の自由』で語っています。これらの思想的土台をぬきにして民主だの自由だのと言つても、空回りするばかり、しかも現実にはいろいろな障害や問題を来たすのです。そんな渦の中に巻きこまれて民主主義の悪夢の中でさまよう高校生であるとしたら、全く気の毒千萬なことです。高校生よ、古典に目を向けよ！

文科系志望の生徒は、大学の何部を志すにせよ、まず哲学史を読むことです。外界に対ししばらく横の窓を閉じて、前方上向きの魂の眼を見開いて東洋と西洋の古典哲学の入口に入ってゆくべきです。哲学的精神は宗教的靈性の前段として尊ぶべきものです。また一方理科系志望の生徒は科学史を読み、科学の発展経路を知り、自分が最も関心のある部門の入門的な参考書に入つてゆくべきです。文科系にせよ、理科系にせよ自分の人生の課題や使命がどこにあるかの見当づけをなし、実力の裏づけのもとにそれに適合する大学を選ぶことです。日本の大学は各大学の特徴を大いに發揮していただきたいです。

第六期はいよいよ大学時代、専門学校時代。入学したら、スタートをしつかりきつて、おのが専門課題に向かつて全身的傾倒をすることです。

さて当人は二十歳をやがて迎えるわけですが、孔子の「三十歳にして立つ」十年前に如何なる門に入るべきですか。大学、専門校に入学してそれでもう入るべき門はないのですか。否、最も大切な門があるのです。大自然の山間か曠野に往つて冥想してみて下さい。人生とは何か。地上の生涯の終りに死の関門が待っているが、生の関門というものはないのか。肉体の誕生の他にたましいの誕生はないのか。

「人新たに生れずば、神の国を見ること能わず」

「人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能わず」

とニコデモというパリサイ人に確言した人がいる（ヨハネ伝第3章）。彼はまた

「われは門なり」（ヨハネ10・9）

と宣言している。この自分を天国、神の国への門だと言っている人のところへ往くに如かずです。この「門」という原語には定冠詞がついています。英語で言えば「ザ・ドア」です。唯一つのこの門だということです。門といつても当然それは扉があるのですから、叩かねばなりません。

叩けよ、さすれば開かれる」（マタイ7・7）



とある通りです。ただし、この叩きは、手のノックではなく体当たりの全身を以てする、全存在を以てする叩きでなければなりません。全身で体当たりをしてぶつ倒れる。すると扉は開かれるのです。ぶつ倒れて仰いでみるとそこには十字架の死から復活したキリストがにっこり笑って迎えて、

「やあ来なさいー」

と招き寄せて下さっている。よろこびのあまり、馳せ寄ってみ前に平伏します。噫、私の自我は、罪は、みんな十字架で贖われていた。

「罪の価は死なり」

という死はもう私に無力となった。無罪、無私の絶対恩寵の中に入れられた。復活の生命が、霊生が与えられて私は立ちあがった。聖霊の生命、生命の聖霊とパウロが告白した事象だ。これが新生であった。そうです。この体験を是非して下さい。何らかの意味で苦難が契機となるでしょう。体験の仕方は各人各様です。どの道、キリストの十字架と聖霊を全身で体験したら、限らない前進が始まります。躓いても転んでも、滑つても倒れても前進できます。人生はドラマですからいろいろなことが起きます。運命、環境いかにもあれ、辛いことに遭うと逆に聖霊の力は強く能き給う。

学歴が何であろうと、小学、中学、高校、大学、専門校、どこでやめようと中退しようと、聖霊を宿した者はその力で人生マラソンを走り貫くことができます。

福音は人生の原動力です。親や先生の教育は上述の如く感謝すべきことですが、一番大切なのは聖霊の愛の力と智慧による教育です。教材は聖書一卷、先生はキリスト、この霊導による自己教育、これが教育の隠れた本道です。

この道を歩き貫いて、この人生がどんなに失敗に見えようと、人々に何と貶されようと、神・キリストの人生学校で、隣人または社会、国家または世界のために、自分の生涯を愛の贈物とした人、そのために全身傷だらけになった人、何らかの十字架を負った人、そういう人が人生学校の本当の卒業生でしょう。その人はただキリストの聖名を讃美してこの世にサヨナラをするでしょう。

〔「エン・クリスト」 第34号 1988年4月 春季号より転載〕

